

日本語集中コースでの「専門の発表」の 取り組み

松本久美子*・守山恵子**・永井智香子*
奥村智紀**・宮原 彬***

1. はじめに

長崎大学留学生センターでは、省令施設となった1996年度から、毎年2回、4月と10月にそれまでの一般コース（補講コース）に加えて、日本語集中コース（研修コース）を開講するようになった。日本語集中コースには、日本語を学習したことがない留学生が在籍する、いわゆるゼロスタートのクラス、初級後半から始めるクラス、初中級あるいは中級のクラスの三つのレベルのクラスがある。このコースは、大使館推薦の国費留学生が中心であるが、大学推薦の国費留学生、私費の学生も受け入れている。

この集中コースでは、日本語コースの締めくくりとして、最後に「専門の研究についての発表」（以下、「専門の発表」という）を実施している。これは、各自がこれまでしてきた研究やこれからの研究のテーマについて、日本語で発表するものである。修了生へのインタビュー調査¹⁾によると、8割を超える学生が「専門の発表」を「役に立った」「いい経験になった」「大学院にはいるときのテストに役に立った」「いろいろな言葉が後で役に立った」「自信になった」「専門の先生との情報交換ができた」などと積極的に評価している。

当留学生センターでは、2000年3月までに「専門の発表」を9回行ってきた。スタート時は他の大学で行われている「専門の発表」を参考にしたこともあったが、毎回、よりよくするために、特に準備の仕方の改善を重ねてきた。第9期を終え、発表に向けての準備の流れもかたまりつつあり、一定の成果も上がって来ている。そこで、本稿では現在「専門の発表」とその準備をどのように実施しているかを報告する。

2. 「専門の発表」の目的

「専門の発表」の目的は以下のとおりである。

①集中コース期間中に習得した4技能を統合して使用する場を設定し、コースの総ま

とめを行うこと。

- ②コースのはじめのスタディガイダンスで、過去の発表のビデオを見せることで、コースの達成目標を学生に示すこと。
- ③留学生センターから専門の学部・研究科に移行する際の橋渡しの学習の場を設けること。

集中コースは15週間のコースで、その短期間の中に基礎的な日本語力を養成しなければならない。特にゼロ、もしくは初級レベルから日本語学習を開始するクラスでは、日常生活における実践的なコミュニケーション能力を養成することを主眼に置いたコースデザインを行っている。また、限られた期間内に専門のためのクラスを設けることは、時間的にかなり無理があり、かえって学習者に負担をかける結果になると考えた。そこで、コース中に専門の研究に関することを盛り込むよりは、コースの最後にある程度日本語力がついた段階で、自分の専門についてまとめ、発表する機会を設けたほうが効果的であると判断した。

「専門の発表」をコース終了時に行うことには、以下のような意味がある。

- ①期末試験も終了した段階なので、自分個人の専門について発表の準備を集中して行うことができる。
- ②コース開始時に示された目標を達成した達成感を得ることができ、自信につながる。
- ③大学院入試を控えた者にとっては面接の際の準備としても有用であると考えられる。

期を重ねるにつれ、技能別クラス（「読解・作文」、「実践会話演習」、「コンピュータ日本語演習」）の中で、専門の発表に至るまでの準備も連携して行われるようになってきている。

3. コース開始時から「専門の発表」にいたるまでの流れ

3-1 コース開始時

集中コースでは、授業開始前にスタディガイダンスを実施している。その際、集中コースのゴールを明確にするために、「専門の発表」のビデオを視聴させている。このビデオでは、いわゆるゼロスタートの学生たちが、集中コースを

終えるころに日本語だけで原稿も見ずに自分の専門について堂々と発表し、質疑応答も日本語で行っている。これから日本語学習を始めようとしている学生たちにこのビデオを見せることによって、学生たちの日本語学習のモチベーションを高めることが期待できる。また、学生たちには勉強しなければならないという覚悟ができ、さらには集中コースの進度が速いことが理解されやすくなる。

3-2 コース期間中（技能別クラスでの取り組み）

「読解・作文」、「実践会話演習」、「コンピュータ日本語演習」のそれぞれのクラスで「専門の発表」に向けた準備が行われている。

3-2-1 「読解・作文」

集中コース（初級）では、コースの開始当初から「読解・作文」のクラス（1週間1コマ）を設けているが、その最後の授業で、発表の原稿作成の際に役に立つと思われる表現を紹介したり過去の研修生の原稿をモデルとして読ませたりしている。

この「読解・作文」の授業は発表の準備のために設けられているわけではないが、全体の流れとしてこの発表にも一定の貢献をしているのではないかと思われる。

「読解・作文」の授業では、既習の文型を用いて教師が作った作文例（A4判1枚。平均1,000字程度。）を毎回配布し、読む練習をするとともに、その内容について質問応答等をする。最後に、同様のテーマで、各自の場合について、翌週の「読解・作文」の授業の前日までに、原稿用紙（400字詰）2～3枚に書いてくるよう指示する。テーマは、例えば、「自己紹介」「わたしの一日」「ある一日の生活」「日本に来るまで」「見学旅行」「わたしの冬休み」「これからの予定」などである²⁾。この授業の目的は、他の通常のコマでは個々の文型の学習が中心となることから、それらの文型を総合的に練習（読解・作文）させ、その過程で学習済みの文型をもう一度確認し自分のものとして身につけさせる、ということであって、必ずしも「作文」そのものにあるわけではない。しかし、「作文」という観点からみても、こうした取り組みは有効である。初級のコース開始当初から、文章を書くときの形式（原稿用紙の使い方を含む）を学び、こうした練習を少しずつ積み重ねて来た学習者は書くことに対する抵

抗感が少なく、中級段階に入ってもその効果は生きている。それは、こうした訓練を受けずに初級後期ないしは中級段階に来てしまった学習者の実情と比較すれば明らかである。後者の場合、通常、書くことへの抵抗感が強く、こうした練習に“気軽に”取り組むこと自体が難しい。また、文章全体がまとまりに欠け、文章の中身以前に、読み手に違和感を与えることが多い。

集中コースで宿題の作文にきちんと取り組んできた学習者の場合、毎回ほとんど抵抗なく「専門の発表」の原稿作成にも取り組む。初稿は母語や英語で書く学習者もいるので、「読解・作文」の授業（宿題を含む）が「発表」の原稿作成にどの程度有効に働いているかは必ずしも明らかではないが、日本語の文章を書くことへの慣れという点だけでも一定の役割は果たしていると思う。

「読解・作文」の最後の授業では、前述のとおり、発表の際に一般的に役に立つと思われる表現を例文とともに紹介したり、それらを巧みに使って書いた過去の研修生の原稿を、表現に注意しながらみんなで読んだりしている。

「一般的に役に立つ表現」とは、例えば、次のようなものである。

- ・自己紹介のための表現
- ・研究の予定を述べる表現
- ・経歴を述べる表現
- ・専門の背景・概要を述べる表現
- ・今後の抱負を述べる表現
- ・発表を終わるときの表現

これらの表現は、授業では例を挙げて確認をするのみで特に練習はしない。この最後の授業のころになると、学習者は、自分の発表のアイデアがかなりの程度できている。上のような表現を学ぶことによって、学習者は、原稿の作成が容易になるだけでなく、全体の構成の面でのヒントもかなり得られるのではないかと思う。

3-2-2 「実践会話演習」

集中コースのなかの技能別クラスのひとつとして、会話のクラス「実践会話演習」を1週間に1コマ（90分）設けている。実践会話演習は留学生と日本人学生の合同クラスである。日本人学生2名がティーチングアシスタントとして

加わるほか、ボランティアとして、異文化や留学生との交流に興味を持つ日本人学生が参加している³⁾。このクラスは、文字どおり、留学生にとっては実践的なコミュニケーション能力を養成すること、日本人学生にとっては日本語を媒介言語とした異文化コミュニケーション能力を高めることを目的としている。

教室活動は、自由会話とショートプレゼンテーションで構成されている。

(1) 自由会話

基本的に留学生と日本人学生がペアになり、各自自由にトピックを選んで会話を行う。留学生と日本人学生の会話が円滑に行われるように、『留学生と日本人学生のための会話素材集—Let's get to know each other better—』⁴⁾を作成し、使用している。

(2) プレゼンテーション

プレゼンテーションは留学生も日本人学生も行っている。留学生はコースを通して一人3回プレゼンテーションを行うことになる。1回目は2-3分程度のもの。2回目は5分程度のもの。3回目は自国紹介で10分程度のものとなっており、いずれもプレゼンテーションの後、質疑応答が行われる。1回目と2回目のプレゼンテーションの内容は基本的に「読解・作文」のクラスでテーマとして与えられたもの（「自己紹介」「私の一日」「日本に来るまで」等）について発表することになっている。3回目の自国紹介についてはコンピュータクラスで取り込んだ自国に関する映像等をパワーポイントを使って発表する学生が多くなっている。

これらのプレゼンテーションを通して、留学生は多人数の前で日本語で発表することに慣れていく。また、日本人のプレゼンテーションのテーマ（「折り紙」「友達の結婚披露宴」等）は自由なので、留学生は全く新しい内容について発表を聞き、それについて質問することになる。留学生同士だけではなく、日本人学生からの質問も受けたり日本人学生のプレゼンテーションに対して質問を行ったりすることを通して、実践的な経験を積んでいる。

また、会話の最後のクラスには、コース中に行った3回のプレゼンテーションを編集したビデオテープをそれぞれに手渡すとともに、「専門の発表」の準備のためのオリエンテーションを行っている。

以上のような活動が、コースの最後に行う専門の研究についてのプレゼンテーションに生かされていると思う。

3-2-3 「コンピュータ日本語演習」

「コンピュータ日本語演習」は各クラスとも週1コマ(90分)となっており、毎期、13~14コマがこの時間に充てられている。

日本語学習の補助的手段として位置付けられているこのクラスでは、「専門の発表」に用いるもののひとつとして、プレゼンテーション用ソフト・パワーポイントの使い方も指導している。そして、クラスの最後の1コマを、「専門の発表」のために充てている。

この授業では、まず、専門の発表を行うさいに必ずしもパワーポイントを使用しなければならないということはない、ということを確認する。そして、その上で、これまでの修了生が作成した専門の発表用スライドの中から次のようないくつかの典型的な例を紹介し、その利点や特長などを説明する。

1. 画像(絵や写真)を多用したもの
2. テキスト中心のもの
3. 効果音を取り入れたもの
4. スライドの表示方法に変化をつけているもの
5. スライド数の少ないものと多いもの

以上のような例を、説明を加えながら見ていくことによって、パワーポイントが画像やテキストを比較的簡単に提示するための単なる道具であることに気づかせる。そして、さらに、上記の例などを参考にしながら、

6. 画像の適当な数量や画像・文字の適当なサイズについて
7. 発表内容を箇条書きにする場合のまとめ方
8. 発表内容に合わせて、スライドをタイミングよく提示する方法
9. 発表時間に適したスライド数

など、パワーポイントでスライドを作成する上での基本的な方法を説明し、最後に、スライドの背景やレイアウトなどを考えさせ、1コマの授業を終了する。以上が「コンピュータ日本語演習」の最後の1コマで行なう「専門の発表」のための授業内容である。

「専門の発表」の準備はコースの最終週に行われるため、この授業では具体的なスライドの作成には取りかかれない。そのため、個別スライドの作成まではできないが、授業終了後から発表当日までの限られた時間でスライドを作成しなければならないことを考えると、予めこのような指導を行なっておくことは有用であると思う。

3-3 コースの最終週

集中コースの最後の週は期末テストを除き、すべて「専門の発表」の準備のために費やされる。最終週の流れは以下の通りである。

- (1) 「専門の発表」の準備の仕方についての説明を行う。その際、最初のガイダンスで見せた過去の「専門の発表」のビデオをもう一度見せる。コース開始時のガイダンスで見たときは全く理解できなかったものがかなり理解できるようになっているということで、学生に自信をつけさせ、改めて、学生の「専門の発表」へのモチベーションを高めるためである。
- (2) 各自、原稿作成にとりかかる。基本的には日本語で直接原稿を書いてくるように指導している。しかし、中には英語、あるいは自分の母語で書き、それを日本語に訳そうとするものがある。そうすると、当然、日本語と英語、または母語の間にレベルの差があり、翻訳の際に苦労することになる。

学生は、各国語の辞書や専門の辞書を使いながら、専任あるいは非常勤の教員と一対一で原稿を整えていく。教員が学生の言いたいことを理解し、専門の用語や適切な言いまわしを提案して、原稿の体裁が整うまでには、かなりの時間がかかる。たとえば、妊娠中毒症を研究している学生の発表原稿の中で「ドップラー検査を行う」と言うべきか「ドップラーを行う」と言えるのか、が問題となる。また、経営学を専攻する学生の場合、「事前に行う分析」を「事前分析」と言えるのかを確かめる必要がある。水産が専門の学生の場合、研究対象のGudusiaをカタカナでどう書くか、が問題となる。専門の辞書で調べたり、研究室の指導教官や同じ研究室の学生の助けを借りなければならないこともある。

学生は、最終的に原稿ができあがるまでに、2～3人の教員に見てもらったことが多い。この間に指導教官の研究室を訪ねたり、指導教官と連絡を取ったりして、特に、専門用語についての指導を受けたり、写真などの視覚資料を借りたりする者もいる。

- (3) 原稿が完成した者は原稿をコンピューターのワープロソフトを使って清書する。清書も必ず教員がチェックする。さらに当日、出席者に配る語彙リストを作成する。リストに載せる語彙は、専門性の高い語を中心に、10～20を学生が選ぶ。一つの語につき、日本語、日本語の読み、英語の意味を載せている。また、発表用のスライドなどを作成する。

ちなみに、2000年度後期の発表題目は、つぎのとおりであった。

「信用に基づく銀行業務」

「妊娠中毒症」

「経営学と市場管理-マーケティングプラン」

「日本での英語の教え方とインドネシアでの教え方の比較」

「甲状腺癌の治療法」

「道德教育」

「自然科学の教え方」

「コンピュータを使った授業」

「ポリカルチャーシステムにおけるChapila (*Gudusia chapra*) が及ぼす生産量と餌に与える影響」

「海域における環境汚染物質の動態に関する研究」

- (4) 発表の練習を行う。学生は一人ずつ、発表会場となる部屋で、一人またはそれ以上の教員の前で発表練習をし、チェックを受ける。内容に関するチェックはすでに受けているので、この時は、特に発音の指導がなされる。また、パワーポイントを使用するための機材の使い方や、そのほかの資料の効果的な提示の仕方なども練習する。夜遅くまで発表用資料の訂正を続ける学生もいる。

なお、発表の後、学生がコンピューターを使って打ち込んだ原稿とパワーポイントなどを使って作成した提示用資料の一部をまとめて、期ごとに冊子を作成している。

4. 発表当日

発表の開始は午前9時、または9時半で、出席者は、センター長、専任および非常勤の教員、ティーチングアシスタントの日本人学生、会話パートナー、留学生の家族、留学生の友人などである。すべての発表は記録として残すためにビデオテープに録画している。平均発表時間は一人5分程度で、その後の質疑応答が5分から10分くらいである。ゼロスタートの初級クラスであるAクラスから順番に発表を行っていく。途中休憩をはさみ、最後のCクラスの発表が終わるのは12時前後になる。

留学生たちは緊張した面持ちで発表に臨む。前日のリハーサルでは非常にスムーズに発表練習をしていた学生も緊張でとぎれとぎれになることも珍しくな

い。基本的には原稿を見ないでぜんぶ暗記して発表にのぞむように指導しているが、大学院入試を控えている者など、暗記する余裕のない者は原稿を見ながらの発表となる場合がある。

いままでに9回「専門の発表」を行ってきたが、最初のころは質疑応答の時に、ほとんど質問が出ない場合もあった。しかし、回を重ねるにつれ専任や非常勤教員だけでなく、日本人学生なども積極的に質問をするようになってきて、質疑応答が充実してきた。さらに、最近は留学生からの質問も増えてきた。特に、専門に近い留学生同士では非常に興味深い鋭い質問が出されることもある。

すべての発表が終わったあと軽食と飲み物を用意し、簡単な立食パーティーを実施している。集中コースの修了式は別に設けられているが、日本語の学習と「専門の発表」も終えたあとにあるこの立食パーティーが事実上の“修了式”のようなものであると言える。事実、この席では留学生たちも非常にリラックスし、ひとつの区切りを祝うかのように教員や留学生仲間、ボランティアの学生たちと談笑している姿が見られる。

6. 終わりに

「専門の発表」は当留学生センターの教員全員が協力して行っており、特に技能別クラスでの取り組みがよりよい「専門の発表」に役立っていると考えられる。第10期以降も「専門の発表」をコースの中で続けていくつもりであるが、今後、

- ①質疑応答の際に英語の使用を許すかどうか、
 - ②各技能別クラスで、「専門の発表」を視野に入れた内容をさらにもりこむことができないか、
 - ③一般コースの中で発表に焦点を当てたクラスを開設できないか、
- などについて、検討し、改善していきたいと考えている。

註

- 1) 守山恵子他 (2000) 「留学生の求めていること-研修コース修了生インタビュー調査報告」『長崎大学留学生センター紀要』第8号、pp.1-30
- 2) 「読解・作文」の授業の概要は本紀要の「授業記録」にある。
- 3) 「実践会話演習」については、松本久美子 (1999) 「留学生と日本人学生の初級会話合同クラス-双方向学習による異文化コミュニケーション能力の養成-」『長崎大学留学生センター紀要』第7号、pp.1-34 に詳しく述べている。
- 4) 松本久美子 (2000) 『留学生と日本人学生のための会話素材集-Let's get to know each other better-』長崎大学留学生センター

(*留学生センター助教授、**同講師、***同教授)